九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

福岡市で開催された「東アジアの伝統文化国際会議」

柴田, 篤
九州大学文学部

https://doi.org/10.15017/18151

出版情報：中国哲学論集. 20, pp.107-118, 1994-10-10. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

学界消息

福岡市で開催された「東アジアの伝統文化国際会議」

柴田　篤

一

一九九四年四月八日（金）から十日（日）まで、福岡市において「東アジアの伝統文化国際会議」が開催された。先ず八日午後には福岡市立中央市民センターを会場として、一般市民も参加した「シンポジウム・貝原益軒を考える」（同実行委員会主催、福岡市・西日本新聞社共催）が開かれた。続いて九日には同センターで、十日には会場を移してNHK福岡センタービルで、二日間にわたって「国際会議」が開かれた。この三日間にわたる会議は、福岡市を中心とした九州地区の大学等に所属する中国哲学・中国文学の研究者によって組織された同実行委員会（委員長は町田三郎・九州大学教授）が、三年がかりで準備を進めてきたものであったが、そもそもの呼びかけ人は、中国近世思想史研究者で九州大学名誉教授の岡田武彦氏であった。岡田氏は、「大会要綱」の会長挨拶の中で、この会議の主旨について次のように述べている。

この国際会議は、東アジア殊に中国の伝統文化を基調として、三つの分野から研究発表及び討論が行われます。

第一は、中国の伝統文化そのものの研究。

第二は、その周辺諸国への展開に関する研究。

第三は、近年注目を集めている「新儒家」に関する研究。

まもなく二十世紀が終わろうとしている今日、世界は政治的、経済的、社会的、文化的に激しく揺れ動いております。我々は、伝統文化・思想をもう一度学び直すことによって、人類の未来を切り拓いていく何ものかをそこから探し出すことができるかどうか。伝統思想を今日に新しく生かす方法を見いだすことができるかどうか。今回の国際会議は、このような重大かつ切実な課題を担っていると思います。二十一世紀への展望が得られるような豊かな成果を期待しております。

また、今回の国際会議では、初日に一般市民の方々のご参加を得て、「シンポジウム・貝原益軒を考える」を開催いたします。福岡は、幅広い学問を修めた貝原益軒を始め、亀井南冥、昭陽といった優れた学者を輩出した土地柄でもあります。先達の言葉に耳を傾けることは大変意義深いことだと思います。

このような主旨に賛同して、国内から、また中国・韓国・台湾・香港・シンガポール・オーストラリア・アメリカ・カナダ・フランス・スロベニアといった世界各国から、約六十名の学者が研究発表者として参集した。また、その外、国内の研究者約四十名が会議に一般参加した。以下に掲げる発表者一覧を一瞥しても分かるように、世界的レベルで活躍中の東洋思想研究者がこのような形で一堂に会するのは、きわめて珍しいことだと言えよう。招聘に応じた発表者は、上述の三つの分野の中から自分でテーマを選び題目を決め、事前に発表要旨を提出して会議に臨んだ。

今回の国際会議の特色の一つは、福岡市で開催ということから、地元福岡が生んだ江戸時代の儒学者である貝原益軒（一六三〇～一七一四）を取り上げ、彼に関する講演及びシンポジウムを冒頭に置いた点である。黒田藩士であった益軒は、儒学に限らず、医学・薬学・自然科学・地誌・歴史書と様々な分野において優れた業績を残したが、この会議では郷土の先賢の単なる回顧と顕彰が目的ではなく、現代における学術的評価を基にその今日的意味について考えよう、というところに特色があった。昨今の「江戸」ブームや「地方再発掘」も影響してか、四百人以上の一般市民が集まり、熱心に会議に参加した。

先ず映像によって、益軒の生涯と業績が紹介された後、コロンビア大学名誉教授のウイリアム・セオドア・ドバリー氏による基調講演「世界的評価を受ける貝原益軒」が行なわれた。内容は本誌に掲載しているので参照頂きたい。基調講演に続いて、シンポジウムが行なわれた。コーディネーターは、『徳川合理思想の系譜』『近世初期実学思想の

研究』などの著書がある日本思想史研究者の源了圓氏（元東北大学教授）で、パネリストはドバリー教授に師事し、貝原益軒研究で学位を取得しているメアリー・エヴェリン・タッカー女史（バックネル大学教授）、貝原益軒をはじめとする近世史研究の井上忠氏（元福岡大学教授）、医師として漢方による療法を積極的に取り入れ実践している原敬二郎氏（原病院院長）と木下勤氏（温知堂木下クリニック院長）、貝原益軒を含む紀行文を中心とした江戸文学研究者の板坂耀子女史（福岡教育大学教授）の五人で、益軒の幅広い人間像を捉えるにふさわしい多彩な顔触れであった。シンポジウムの詳細な内容については、筆者が別誌に紹介しているので参照頂きたい（財団法人　西日本文化協会発行「西日本文化」三〇二号所載「現代に生きる貝原益軒を求めて」、一九九四年六月）。また、シンポジウムのコーディネーターを務められた源了圓氏が、一九九四年五月二十二日付「西日本新聞」朝刊に「東アジアの伝統文化国際会議に出席して」という題で、「国際会議」全体にわたる感想を寄稿しておられる。

二

さて、「国際会議」は四月九日、岡田武彦会長による基調講演「日本文化と簡素の精神」から始まった。同氏は、先ず東洋文化の特色と価値は、「簡素の精神」にあり、それは回帰を志向することによるものであると述べる。特に日本においてその傾向は顕著であるとし、詩文・芸能・建築・書画・陶磁器などの各分野における「簡素の精神」を具体的に考察する。更に、老荘思想・仏教・儒教・神道との関連で論究し、最後に、現代における人間疎外や環境破壊などの弊害に対して、回帰を志向する東洋文化の価値を再認識する必要が生じた、と結ばれた。

会議は三つの分科会に分かれ、各分科会とも発表時間は一人二十分で、三名ないし二名の発表のあと、一人十分の割合で質疑討論が行なわれた。二日間にわたる発表者・発表題目及び司会者は、以下の通りである。（括弧内は分科会場ごとの参加人数）

四月九日(土)

◇一〇時～一一時三〇分

第一分科会（四十五名）

宋明の道学詩について

「心遠」考―宋代儒家の意識構造に関する一考察―

中庸の解釈をめぐって

九州大学　福田　殖

久留米大学　佐藤　仁

東北大学名誉教授　金谷　治

（司会）九州大学　町田三郎

第二分科会（三十八名）

清末民国初の思想的展開―伝統と近代―

明清期商人倫理思想の現代的意義―東アジアの経済発展と宋明儒学・新儒教―

中国の公と日本の公〔おほやけ〕

関西大学　河田悌一

九州大学　川勝　守

大東文化大学　溝口雄三

（司会）九州大学　柴田　篤

第三分科会（三十一名）

現代儒学的回顧与展望

毛沢東対中国伝統文化的継承的分析

従白沙到陽明

プリンストン大学　余英時

香港中文大学　劉述先

マクリー大学　姜允明

（司会）オーストラリア国立大学　柳存仁

◇一一時五〇分～一二時五〇分

第一分科会（四十六名）

儒教的資本主義の精神

岡本監輔の思想について

釜山大学　金日坤

九州大学　町田三郎

（司会）関西大学　坂出祥伸

第二分科会（三十八名）

元代儒学与中華文化　中国社会科学院　徐　遠和

無与自然―中国道家思想的省察―　台湾中央研究院　戴　璉

（司会）台湾故宮博物院　昌　彼得

第三分科会（十七名）

先秦諸子対自然対生態的重視和維護　香港中文大学　鄭　良樹

仁義道徳与二十一世紀　厦門大学　高　令印

（司会）台湾中央大学　王　邦雄

◇一四時～一五時三〇分

第一分科会（二十五名）

明中葉以後的反伝統思潮　新加坡国立大学　李　焯然

論黄梨洲対陽明学的批判継承与理論修正　浙江省社会科学院　呉　光

乾嘉学派与清代実学　中国人民大学　葛　榮晉

（司会）浙江省社会科学院　王　鳳賢

第二分科会（二十二名）

論明宣宗歴代臣鑑一書在文化史上的意義　香港大学　趙　令揚

論説「五花爨弄」　台湾大学　曾　永義

論語版本源流考析　台湾故宮博物院　昌　彼得

（司会）北京大学　張　少康

第三分科会（三十一名）

Companionship With the World：Toward A Neo-Confucian Ecology　コロラド大学　R. L. Taylor

儒教倫理与有機知識分子的自我意識　ハーバード大学　杜　維明

◇一六時～一七時三〇分　（司会）プリンストン大学　余　英時

第一分科会（二十六名）

従曾點之楽到狂禅之風―略談明代心学与禅学的関係　台湾大学　古　清美

摂道帰仏之儒者：焦弱侯　台湾中正大学　龔　鳳程

平民儒者顔鈞及其大中思想　中国社会科学院　黄　宣民

（司会）中国人民大学　葛　榮晉

第二分科会（二十三名）

Morality Books and public Morality in the Southern Sung　台湾中央研究院　朱　榮貴

Why Did Hsun Tzu（荀子）Attack Mencius（孟子）?-An Inquiry Focusing Upon Tzu-Ssu Mencius（子思孟子）'s Theory of "Five Activities"（五行）　台湾大学　黄　俊傑

王陽明与道家　トロント大学　秦　家懿

（司会）ハーバード大学　杜　維明

第三分科会（二十三名）

儒家人文精神的落実問題　台湾中央大学　王　邦雄

儒家与〝後現代〟（Post-modern）　オーストラリア国立大学　柳　存仁

（司会）台湾中央研究院　戴　璉璋

四月十日(日)

◇九時三〇分～一一時

第一分科会（三十四名）

木陳道忞の著述について　九州大学　野口　善敬

中国伝統宗教の転機　早稲田大学　福井文雅
学術的現代儒学の解釈学建立課題私見　テンプル大学　傅偉勲

（司会）九州大学　福田殖

第二分科会（二十三名）
李退渓の書院観に関する一考察　江陵大学　朴洋子
朝鮮の儒者李炳憲の儒教復興論　関西大学　坂出祥伸
趙重峰「東還封事」の改革主義と民本思想　成均館大学　安炳周

（司会）ソウル大学　金學主

第三分科会（三十七名）
原性与圓性：論性即理与心即理的分疏与融合問題兼論心性哲学的発展前景　ハワイ大学　成中英
従継往開来看当代新儒家的学術功績　台湾東海大学　蔡仁厚
和合是中国伝統文化的精髄　中国人民大学　張立文

（司会）香港中文大学　劉述先

◇一一時三〇分～一二時

第一分科会（二十八名）
大同思想的理論価値与実践意義　北京師範大学　周桂鈿
荀子礼学論発微　北京大学　樓宇烈

（司会）中国人民大学　張立文

第二分科会（二十三名）
道教―言葉からの解放（言葉という束縛からの解放）　スロベニア・リューブリアナ大学　Maja Milcinski
Why did Hu Hong（胡宏）Write History？　ニューヨーク大学　C.Schirokauer

（司会）ハワイ大学　成中英

第三分科会（二十四名）

伝統中国方誌学与東亜文化　台湾大学　陳　捷先

由中国戯劇的変化所看中国文化的転変　ソウル大学　金　學主

（司会）香港大学　趙　令揚

◇一四時～一五時三〇分

第一分科会（二十六名）

儒家思想与現代東亜世界　北京大学　陳　來

熊十力対清代考証学的批判　台湾中央研究院　林　慶彰

評中国伝統倫理思想及其基本特点　浙江省社会科学院　王　鳳賢

（司会）北京大学　樓　宇烈

第二分科会（十七名）

貝原益軒と朱熹の「理」思想の比較　中国人民大学　李　甦平

宋代地方叢林之形成・発展与中日仏教関係　ホバート&ウイリアムスミス大学　黄　啓江

中国古代哲学思想与文学思想之聯系　北京大学　張　少康

（司会）台湾東海大学　蔡　仁厚

第三分科会（十九名）

Confucianist Ethic vs. Post-modern Moral Crisis　パリ大学　Leon Vandermeersch

（司会）コロラド大学　R.L.Taylor

三

この国際会議は、中国の伝統文化を基調として、東アジアの思想文化全体にわたる研究発表が行なわれたが、特徴

的であったのは、近年台湾・香港・アメリカなどで注目を集めている「新儒家」に関する研究が課題の一つとして取り上げられ、関連の研究発表が行なわれたことである。また、直接「新儒家」を取り上げていないものでも、伝統思想特に近世以降の儒学思想と近現代の問題との関係について論究する発表が数多く見られた。源了圓氏は、前掲新聞紙上で次のように触れておられる。

内容的には日本の発表者のほとんどすべてが純学術研究として客観的に中国と日本との文化的関係や伝統と現在との関係を究明しようとしたのに対して、欧米や中国の研究者は儒教の現代的意義を論ずるものが多く、そのコントラストが際立っていて大いに考えさせられた。

また、こうしたことに関連して、参加者の一人である河田悌一氏（関西大学）は、一九九四年五月三十一日付「讀賣新聞」〔関西版〕夕刊所載「変わる中国と変わらぬ儒教」の中で、次のように述べておられる。

さきごろ、福岡で開かれた国際シンポジウム「東アジアの伝統文化国際会議」（会長は岡田武彦九州大学名誉教授）に出席した私は、その中国における儒教評価の様変わりの大きさに、改めておどろかされた。

世界各地の八十名ちかい中国思想史研究者をあつめたその会議には、オーストラリア国立大学の柳存仁名誉教授をはじめとして、アメリカからは余英時プリンストン大学教授、杜維明ハーバード大学教授など十一名が、台湾からは昌彼得・故宮博物院副院長ら十二名が列席したほか、中国からも十五名の著名な学者が参加した。が、中国の学者たちは、いずれも以前とはうって変わり、儒教にたいしてきわめて高い評価を与えたのだった。

たとえば、中国社会科学院歴史研究所の歩近智教授は、「孔子の仁学とその現代的意義」と題する発表で、こうのべる。「仁は中華文明と東洋文明の発展に大きな役割を果たしたのみならず、現在の世界と来るべき二十一世紀の人類文明の発展にたいしても、役立つものである」（歩教授は論文参加であった…柴田注）

また、中国を代表する北京大学のある教授は、儒教の主要な徳目である〝五倫（父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信）〟のうち、「君臣の義」を「指導するものと指導されるものとの関係」に読みかえれば、五

倫は現代社会の人間関係のうちに包括される――というのだ。

さらに儒教のなかから、新たな価値の発見も試みられる。朱子学研究者として著名な張立文・中国人民大学教授は、これまで注目されなかった「和合」こそが「中国伝統思想の精髄であり、伝統文化の核心である」と主張。またこの三月、台湾から『哲学と伝統――現代の儒教哲学と現代の中国文化』を出版した、新進気鋭の陳来・北京大学教授も同様の主張をおこなう。すなわち「仁を以て体となす」儒家思想の九〇年代さらに二十一世紀における重要な価値は「和を以て用となす」こと、つまり人と自然との和合、国と国との和平、という「和」にある、と熱をこめて論じた。

こうした中国の学者の儒教再評価の発表をきいて、私は次のような感想をもった。それは、中国大陸において、学術研究の自由が増してきているとはいえ、かれらの研究はやはり国内の政治状況を色濃く反映しているということだ。

つまり、儒教の核心が和合であると主張し、また和の効用を説くのは、まさしく現代の中国が台湾との統一をはかり、日本や西欧諸国との経済協力路線を歩もうと意図することの一つの表れなのである。とともに、共産主義への信念がゆらぐ中国では、儒教による精神教育が必要になってきていることの証明でもある。

シンポジウムが終わった翌日、会議参加者がそろって訪れた佐賀県多久の孔子廟（びょう）で、中国の学者たちが孔子像に手を合わせ参拝するのを見ながら、私はこうおもった。儒教は中国で二千年来、絶えず時の支配者の政治的要求に利用されながら、その生命力を保ってきたし、これからも生きつづけるであろう、と。

最後に、全般にわたる感想が、同じく参加者の一人、林慶彰氏（台湾中央研究院）から寄せられたので、以下に訳出しておきたい。

このたび岡田武彦先生の発起と、九州大学中国哲学史研究室の町田三郎・福田殖・柴田篤等の諸先生の働きにより開催された「東アジアの伝統文化国際会議」は、東アジア伝統文化研究の内外の学者百名近くが参集し、研究主題は日本の儒学者貝原益軒・中国伝統文化・当代新儒家等の研究を包括しており、日本中国学界の一大事件であったと言

える。今回の会議の特色と思われることを幾つかあげてみたい。

（一）東アジア文化研究の総力を結集させた点。

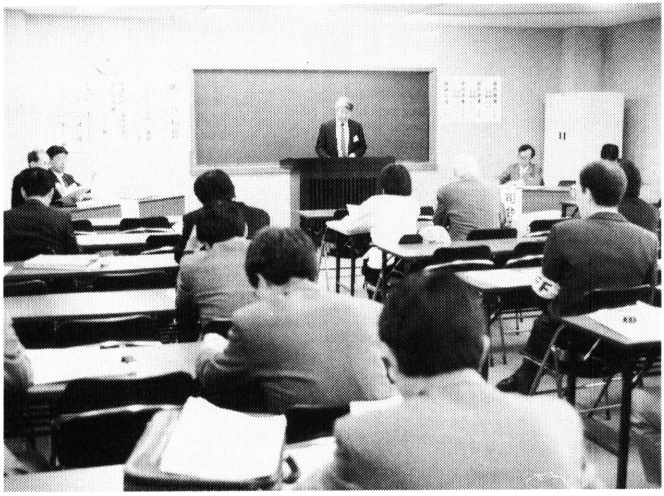
近年、国際学術討論会を開催する風潮が、中国や台湾などにおいて盛んに沸き起こってきたと言える。しかし、主催者の招集力や他の条件がうまく調わないために、往々にして本当に権威ある学者が参加できなかったり、討論会の意義を損なうことも少なくない。今回の大会は、日本・中国・台湾・アメリカ・ヨーロッパなどから権威ある学者が一堂に会し討論に参加しており、主催者の招集力の非凡さを見ることができる。将来、関連の学術活動を行なう場合でも、学者やスタッフ・支援者たちを動員することは決して困難ではあるまい。九州地区は岡田先生の指導の下、またこれらの人々を結集する有利な条件を備えている。

（二）地域の学術の特色を発揚した点。

今回の会議は、この数十年来九州地区で最初の盛大な国際学会で、東アジア地区の各種学術の発展に関して相当深い討論を行なっただけでなく、福岡出身の著名な儒学者である貝原益軒に関して半日を専門的討論会に当てた。このような地域の学術の特色を発揚する事業は、中国大陸ではこの十数年来特に力を入れて推進してきたことである。今回の会議は、貝原益軒の研究をきっかけとして、世界各地の学者が更に九州地区における学術の伝統と特質を理解することができるようにし、併せて内外の学者を、日本各地域の伝統的学術の研究に誘うものである。その意味で今回の大会が創出した功績は非常に大きい。

（三）周到な準備と十全な配慮。

今回の大会は、会場も宿舎もそれぞれ二ヶ所に分かれていたが、限られた人員であらゆる点に配慮がなされており、いささかもミスがなかったのは、周到な準備によるものである。中国や台湾で学術会議を招集する場合、往々にして同伴者の参加を要請しないし、認める場合でも、彼らの見学活動の世話まではしない。今回の大会では、参加した学者の同伴者のために二、三日の見学小旅行をセットし、これには九州大学中国学の院生・学生が交替で接待にあたり、参加した同伴者たちは安心して十分に楽しむことができた。細やかな配慮がなされていたことが、これによってもわかる。

以上述べた幾つかの特色からも、今回の国際会議の成功が各地の会議に勝るものであることがわかるし、学術会議のよき模範となったと言えよう。

（付記）　この国際会議の研究発表を基に、研究論文集（題未定）が編集され（町田三郎・福田殖・黄俊傑・柴田篤編）、台湾の正中書局から出版される予定である。